

関東・甲越地区におけるスモン患者の検診 — 第 33 報 —

中嶋 秀人 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)
小川 克彦 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)
白岩 伸子 (筑波技術大学保健科学部)
森田 光哉 (自治医科大学医学部内科学講座脳神経内科学部門)
長嶋 和明 (群馬大学医学部附属病院脳神経内科)
尾方 克久 (国立病院機構東埼玉病院臨床研究部)
川上 途行 (慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室)
大竹 敏之 (東京都医学総合研究所社会健康医学研究センター難病ケア看護ユニット)
中村 健 (横浜市立大学附属病院リハビリテーション科学)
長谷川一子 (国立病院機構相模原病院神経内科)
小池 亮子 (国立病院機構西新潟中央病院臨床研究部)
瀧山 嘉久 (山梨大学大学院総合研究部医学域神経内科)
橋本 修二 (藤田医科大学衛生学講座)

研究要旨

令和 2 年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診者数は対面 48 名と電話問診 25 名の計 73 名 (平均年齢 80.8 歳、男性 27 名、女性 46 名) で、新規受診者が 1 名あったが、昨年に比べて 9 名減少し、75 歳以上が 76.7% を占めた。受療状況は在宅で外来受診が 74.0% を占め、長期入院・入所比率は 13.7%、毎日または時々介護必要が 63.9% を占めた。昨年に比べ装具なしで歩行可能は 32.9% と低下し、最近 1 年間の転倒の既往も 54.8% と 7% 増加し、高齢化を背景にした ADL 低下が示された。ここ 10 年間の介護保険によるサービスの中でも訪問看護と訪問リハビリテーションの増加幅が大きく、高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増加していることがうかがえた。患者の 30.1% は一人暮らしであり、高齢化や独居における介護体制の維持も引き続き必要である。

A. 研究目的

昭和 63 年度から関東・甲越地区にて行っているスモン患者の検診を継続し、令和 2 年度の関東・甲越地区におけるスモン患者の現況を明らかにする。

B. 研究方法

関東・甲越地区のスモン患者のうち、1 都 3 県の在住者には主にチームリーダーが検診案内を郵送し、その他 5 県は主に検診担当者が連絡した。検診後に送付された「スモン現状調査個人票」とスモン医療システ

ム委員会からの集計資料をもとに、同意の得られたスモン検診患者の現況を分析した。

(倫理面への配慮)

本研究は、受診者本人自身からそのデータの研究資料として用いることについて、受診時に文書で同意を得て、同意がない場合にはデータから削除した。なお、データは、匿名化して個人を同定できないようにして集積し、データ解析を実施した。

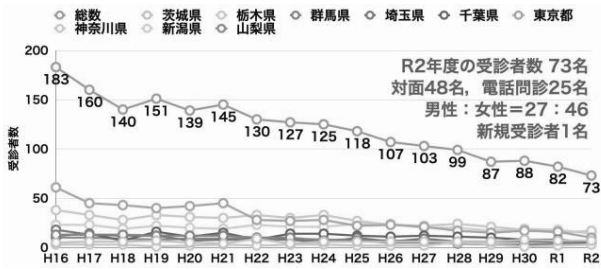


図1 受診者総数の推移

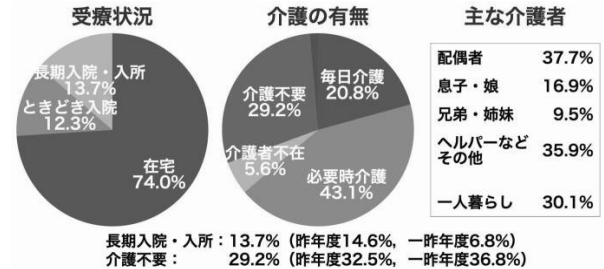


図3 療養状況・介護の有無

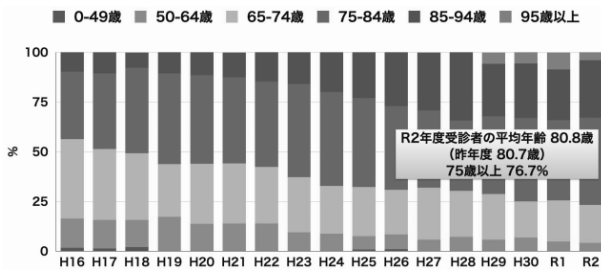


図2 受診者数の年齢層割合の推移

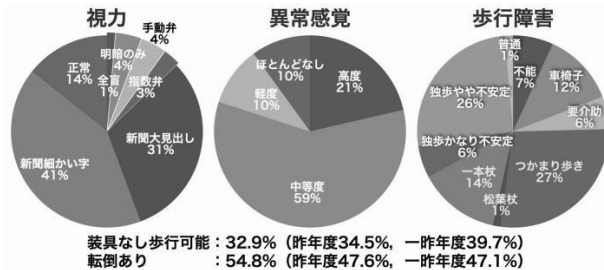


図4 主な症状：視力障害、異常感覚、歩行障害

C. 研究結果

1. 受診者数

同意の得られた受診者数は73名（平均年齢80.8歳、男性27名、女性46名）。受診者総数の継続的推移を図1に示す。受診者総数は16年度の183名から年度ごとに減少し、令和2年度は新規受診者が1名あったが、昨年に比べて9名減少した。地域別では、茨城県7名、栃木県3名、群馬県4名、埼玉県7名、千葉県5名、東京都10名、神奈川県17名、新潟県14名、山梨県6名であった。

2. 受診者の年齢

平均年齢は80.8歳と昨年の80.7歳より0.1歳高かった。年齢構成は50～64歳4.1%、65～74歳19.2%、75～84歳43.8%、85～94歳28.8%、95歳以上が4.1%であり、年々高齢層が増加し、令和2年度は全員50歳以上で、昨年と同様に75歳以上が76.7%を占めた。平成16年からの各年齢層の割合の推移を図2に示す。

3. 療養状況および介護

療養状況および介護について図3に示す。在宅74.0%、時々入院が12.3%、長期入院（入所）は13.7%であり、高齢化に伴い長期入院の割合が一昨年から昨年度に倍に大きく増加したが、令和2年度も昨年度と同

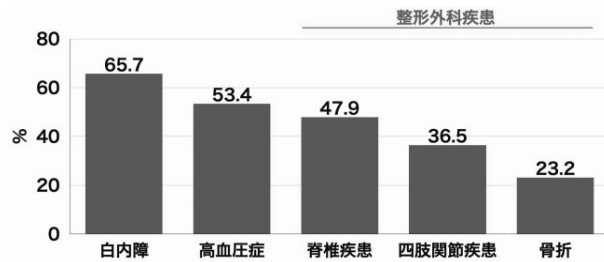


図5 併発症

等の比率であった。受診者の63.9%が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も5.6%でみられ、問題点としてあげられた。主な介護者は配偶者37.7%、子供16.9%、兄弟・姉妹9.5%、ヘルパーなどその他35.9%であった。また受診者の30.1%は一人暮らしであった。

4. 主な症状

視力障害、異常感覚、歩行障害の内訳を図4に示す。視力がほとんど正常は14.3%と低く、指数弁以下が12.9%でみられた。異常感覚は中等度以上が72.7%と昨年と同等で、痛みは24.7%に伴っていた。歩行障害では不能・車椅子・要介助は25%で昨年と同等であったが、装具なしで歩行可能は32.9%と年々減少していた、最近1年間の転倒の既往も54.8%と昨年より7%増加した。

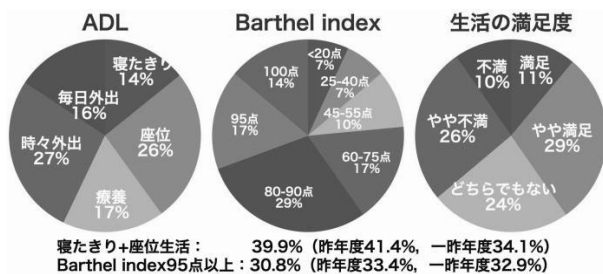


図6 ADL および Barthel index、生活満足度

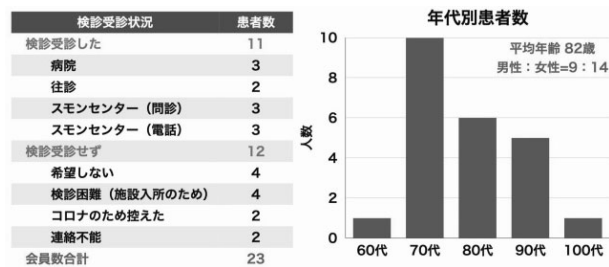


図8 患者会の現況 (東京スモン患者の会)

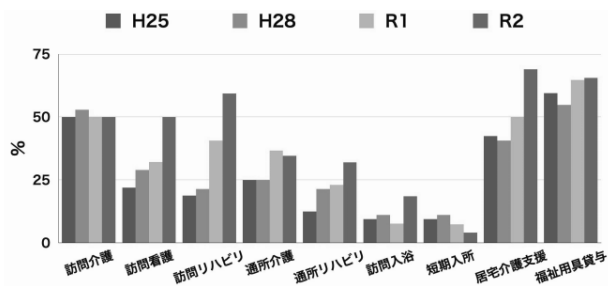


図7 介護支援サービスの内訳

5. 併発症

併発症について図5に示す。白内障 65.7%と多く、高血圧症も 53.4%と多かった。また、整形外科的疾患である骨折 23.2%、脊椎疾患 47.9%、四肢関節疾患が 36.5%と多かった。

6. 日常生活動作 (ADL) および Barthel index、生活の満足度

ADL および Barthel index の結果を図6に示す。寝たきり 14.2%、座位生活 25.7%と高率で、一方、毎日あるいは時々外出する人の割合は 42.8% 占めた。この外出できる人の割合は、一昨年度 56.2%、昨年度 52.1% であり、年々減少していた。また Barthel index 95 点以上と機能良好例は 30.8% と低下した。生活満足度では、「満足・どちらかという満足」は 40.3%、「不満・どちらかという不満」は 36.1% であった。

7. 保健・医療・福祉・サービスの利用

介護保険によるサービス利用状況の結果を図7に示す。訪問看護と訪問リハビリテーションの増加幅が大きく、通所介護と通所リハビリテーションの増加が続いている。居宅介護支援や複視腰部貸与も増えており、高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増

加していることがうかがえた。

8. 発表者担当患者会の現況 (東京スモン患者の会)

日本大学神経内科がスモン検診を担当している東京スモン患者の会の令和2年度の検診受診現況を図8に示す。患者会会員数は 23 名で、令和2年度のスモン検診の受信者は 11 名、内訳は病院 3 名、往診 2 名、会の事務局であるスモンセンターでの受診が 3 名、スモンセンターから電話問診した人が 3 名であった。一方検診を受診しなかった人が 12 名あり、検診を希望せずが 4 名、施設入所などの理由で検診困難が 4 名、COVID-19 流行のため控えたが 2 名、連絡不能 2 名であった。令和2年度初めて電話問診を始めたところ 3 名が希望された。

D. 考察

昭和 63 年度からの検診を継続し、令和2年度の関東・甲越地区における患者の現況を明らかにした。受診総数は 73 名 (平均年齢 80.8 歳、男性 27 名、女性 46 名) で、受診者の高齢化を反映して平成 16 年度以後徐々に減少し、新規受診者が 1 名あったが、昨年と比べて 9 名減少した。75 歳以上が 76.7% を占め、患者の高齢化が一段と進んでいた。現況として、在宅 74.0% と外来受診をしている患者が多かったが、長期入院 (入所) 比率は一昨年から昨年度に倍に大きく増加し、令和2年度も 13.7% と昨年度と同等であった。受診者の 63.9% が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も 5.6% でみられ、問題点と考えられた。症状では視力障害、異常感覚、歩行障害が多いが、歩行障害に関して、装具なしで歩行可能は 32.9% と昨年よりも低下し、最近 1 年間の転倒の既往も 54.8% と昨年より 7% 増加しており、転倒予防も今後の課題と考えた。

生活の満足度では受診者の 36%で不満をみとめた。介護保険によるサービスの利用状況では、ここ 10 年間全般的に利用頻度が大きく増加していたが、訪問看護と訪問リハビリテーションの増加幅が大きく、高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増加していることがうかがえた。当班で実施してきた支援内容の周知についての広報活動がそのサービス受療の向上に寄与してきたと考えられるが、患者の 30.1%は一人暮らしであり、高齢化や独居における介護体制の維持も引き続き必要である。

E. 結論

令和 2 年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診者は 73 名、新規受診者が 1 名あったが、受診数は昨年より 9 名減少し、75 歳以上が 76.7%を占めた。受療状況は在宅が 75%を占めたが、装具なし歩行可能者の比率と介護不要者の比率は低下し、ADL として寝たきり・座位生活は 40%を占めた。本年度は COVID-19 流行によりスモン検診受診を控えた患者もいたが、高齢化を背景にした ADL 低下により、検診受診が困難な状況もうかがえるため、電話検診などの対応を進める必要もあると考えられた。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

1) 中嶋秀人, 小川克彦, 白岩伸子, 森田光哉, 長嶋和明, 尾方克久, 里宇明元, 大竹敏之, 中村 健, 長谷川一子, 小池亮子, 瀧山嘉久, 橋本修二: 関東・甲越地区におけるスモン患者の検診 - 第 32 報 - . 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (難治性疾患政策研究事業) スモンに関する調査研究班. 令和元年度総括・分担研究報告書, pp. 59-62, 2020.

2) 中嶋秀人, 小川克彦, 里宇明元, 大竹敏之: 東京都における令和元年度のスモン患者検診. 厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) スモンに関する調査研究班. 令和元年度総括・分担研究報告書, pp. 95-97, 2020.